



Data

監督・脚本：オタル・イオセリアーニ

出演：ダト・タリエラシュヴィリ / ビュル・オジェ / ピエール・エテックス / ファニー・ゴニン / タムナ・カルミゼ / ラシャ・シェヴァルナゼ / ニカ・エンデラゼ・ムスセリシュヴィリ / ギヴィ・サルチメリゼ / ニノ・チュハイゼ / オタル・イオセリアーニ

👁️👁️ みどころ

1934年にグルジアに生まれ、1979年にフランスへ移ったオタル・イオセリアーニ監督の自叙伝的映画だが、どこまでがホントで、どこまでが作りもの？旧ソ連下のグルジアにおける映画の検閲は、中国や戦前日本のそれと同じく大変！そんな中での青年監督の映画づくりの苦悩とは？

そんなテーマだが、声高に主張せず、ほんわかと見せるところが巨匠のテクニク。どの国でもどの時代でも「いい人」はいるものだと再認識しながら、主人公の生きざまを楽しみたい。もっとも、映画中盤に「あるもの」を登場させる「お遊び」と、その再登場による結末のつけ方を、あなたはどう見る？これは巨匠ならではの「特権」だろうが、その賛否は？

イオセリアーニ監督を知ってる？その著名度は？

あなたはグルジアのオタル・イオセリアーニ監督を知ってる？パンフレットによると、1934年にグルジアで生まれたオタル・イオセリアーニ監督は『落葉』（66年）、『素敵な歌と舟はゆく』（99年）、『月曜日に乾杯！』（02年）などで映画通には有名で、世界的な巨匠らしい。今年1月24日に、『旅芸人の記録』（75年）、『エレニの旅』（04年）（『シネマルーム8』307頁参照）等で有名なギリシャのテオ・アンゲロプロス監督が76歳で死亡したが、日本では99歳にして最後の作品と宣言して『一枚のハガキ』（11年）（『シネマルーム27』91頁参照）を監督した新藤兼人監督がいる。さらに、ポルトガルには100歳を超えて『コロンブス 永遠の旅』（07年）を監督したマノエル・ド・オリヴェイラ監督がいる。

他方、映画評論を書くようになってから私は、『カティンの森』(07年)(『シネマルーム24』44頁参照)でポーランドのアンジェイ・ワイダ監督を、『ウェディング・ベルを鳴らせ!』(07年)(『シネマルーム22』162頁参照)を観て旧ユーゴスラビアのエミール・クストリツァ監督を発見したが、グルジアのオタル・イオセリアーニ監督についてはその名前も作品も全然知らなかった。これでは映画評論家と名乗るのは失格?それとはもかく、そんな有名なイオセリアーニ監督の自叙伝とも言うべき本作では、国のあり方と映画づくりのあり方が巨匠らしい老練なタッチで・・・。



鹿児島ガーデンズシネマほかにて絶賛公開中! © 2010 Pierre Grise Productions

グルジアという国は?映画づくりの自由は?

3月13日に観た『捜査官X』(11年)では、『ラスト、コーション(色、戒/LUST, CAUTION)』(07年)(『シネマルーム17』226頁参照)ですばらしい演技をみせた美人女優湯唯(タン・ウェイ)の「復活」がうれしかった。『ラスト、コーション』は政治的な内容と性描写の作品のため、タン・ウェイは中国映画界からほぼ抹殺されたいから、「かの国」の映画づくりは大変だ。また、戦前の日本でも映画の「検閲」が大変だったことは、役所広司と稲垣吾郎が共演した『笑の大学』(04年)を観れば明らかだ(『シネマルーム6』249頁参照)。

イオセリアーニ監督の分身とも言える本作の主人公ニコ(ダト・タリエラシュヴィリ)が生まれたのは、旧ソ連の共和国の1つであった時代のグルジア。映画冒頭、少年時代のニコとその親友のルカ、そしていつもこの2人と一緒に遊んでいる美少女ババパラによる

牧歌的な子供時代が描かれるが、さてその実態は？結構ヤンチャだった少年時代を経てニコは今若手映画監督に成長していたが、「かの国」での検閲は厳しく、ニコがつくった映画は結局上映中止に。そこに至るまでのいかにも官僚主義的な検閲システムの姿は外部から見てると滑稽だが、当の本人はたまったものではない。唯一のうっぴん晴らしになるのは、検閲官の1人になっていたバビラ（ニカ・エンデラゼ・ムスセリシュヴィリ）が「この作品を公開禁止にしたら、皆さんが恥をかくだけ」と啾啾を切るシーンだが、こんな発言をして大丈夫？

ニコはなぜフランスへ？ここなら映画づくりは自由？

イオセリアーニ監督は1979年にグルジアからフランスに「渡った」そうだが、そんな自叙伝を見るかのように、本作中盤にはニコが祖父（ギヴィ・サルチメリゼ）の尽力によってグルジアからフランスへ「渡る」様子が描かれ



鹿兒島ガーデンズシネマほかにて絶賛公開中！ © 2010 Pierre Grise Productions

る。たまたまフランスから来ていたフランス大使へのニコたちの接触や上映禁止とされたフィルムの持ち出しは、すべて「盗聴」によって当局に把握されていたらしい。その結果ニコはそれだけで逮捕されてしまったから、旧ソ連邦時代のグルジアは大変だ。したがって、ニコのフランス行きは一種の「亡命」のようなものだが、それができたのは祖父が政府高官にワイロ代わりにプレゼントする高級ワインをニコに持たせてくれたため。つまり、この政府高官は思想的にややこしそうなニコをフランスに「出国」させることによって、高級ワインを受領しつつコトなかれ主義を貫いたわけだ。

フランスでニコを迎えてくれたのは、祖父の旧友ミハイル（オタル・イオセリアーニ）とその妻カトリーヌ（ビュル・オジェ）また、グルジアから持ち出したフィルムを観たフランスのプロデューサー（ピエール・エテックス）はニコを気に入ってくれたから、フランスでのニコの監督人生は順風満帆・・・？フランスもアメリカもたしかに自由の国だが、そこでの映画づくりは「商売」として成り立つことが大前提。しかして、フランスでは芸術性と商業性は両立するの？映画づくりの自由とは？

ニコの実力は？それが不明だから少しいライラ・・・

ニコがグルジアで
つくっていた映画は
少しだけ私たちにも
紹介されるが、それ
だけではその出来は
わからない。フラン
スでニコがつくって
いる映画も、プロデ
ューサーにイマイチ
そのテーマや内容が
わからないのと同様、
私たちにもわからな



鹿兒島ガーデンズシネマほかにて絶賛公開中！ © 2010 Pierre Grise Productions

い。近時の「製作委員会方式」が邦画をダメにしてきたことは『日本映画、崩壊 邦画バブルはこうして終わる』（斉藤守彦著・2007年・ダイヤモンド社）で詳しく分析されているが、その問題点はフランスでも同じようだ。つまり、「カネを出す以上、ヒットしてもらわなくては困る」とばかりにプロデューサーは撮影に口出しするわ、勝手に編集するわ、ときたから、ニコが頭にきたのは当然。完成期限が迫る中でニコがすべてを編集し直すことによってやっと映画は完成したが、さてその試写会場での反応は？映画監督がもっとも緊張するこの晴れの舞台における反響は散々だったが、それは監督がダメなせい？それとも・・・？

本作は私たちがグルジアという国の世情に疎いというハンディキャップがあるうえ、ニコの映画監督としての実力がわからないから少しいライラ。ニコはイオセリアーニ監督自身だと宣言していればそれほどではないのかもしれないが、本作のストーリーだけでニコの監督としての苦悩を描こうとするのなら、もう少しニコの実力を私たちに見せつけてくれる必要があるのでは・・・。

賞賛評が多いが、この「お遊び」をどう評価？

本作は巨匠イオセリアーニ監督作品とあって新聞評はもちろん、『キネマ旬報 2012年3月上旬号』の「REVIEW 鑑賞ガイド」でも大久保清朗4点、根岸洋之5点、寺岡ユウジ3点と評価は高い。しかし、グルジアにおけるニコの映画づくりの様子を見ると、祖父が貴族だということにあぐらをかいての「わがまま、好き放題」という印象がある。また、ニコがフランスに「渡れた」のは祖父やミハイルらの協力のおかげと考えれば、自分の映画づくりのスタンスは尊重するとしても、少しはプロデューサーたちとの調

和も考えなければダメだが、ニコにはその姿勢がゼロ。これでは、いくら実力があっても周囲の人たちに認めてもらうのは難しいのでは……。この点ニコはきっとイオセリアーニ監督とは大きく異なるキャラなのだろうが、なぜニコはこんなにわがままなの？



鹿児島ガーデンズシネマほかにて絶賛公開中！ © 2010 Pierre Grise Productions

本作の原題『Chantrapas シャントラパス』は「歌えない人」、つまり「社会の枠組のなかで、うまく生きていけない駄目人間」という意味らしいから、まさにニコは原題どおりのキャラ。他方、『汽車はふたたび故郷へ』という邦題は完全な意訳だが、試写会が無惨な結果に終わった後の展開を見ていると、この邦題もいかにピッタリだ。しかして、本作ラストに見るイオセリアーニ監督の「お遊び」をあなたはどう評価？本作のラストは、フランスで映画監督になる夢が敗れてグルジアの故郷に戻ってきたニコが、家族たちと共に川のほとりでピクニックに興ずるシーケンス。そこでの食事は、自分たちが川で釣った魚をその場で焼いて食べるものらしい。映画の中盤にもフィルムを運ぼうとしているニコが川の中に「あるもの」を発見してビックリし、川の中に落ちてしまうシーンが登場するが、このシーンでその意味を理解できた人は少なかったのでは？しかして、本作ラストでも川で魚を釣っているニコの目に再び「あるもの」が……。さて、これはナニ？そして、本作はいかなる結末を？

イオセリアーニ監督ほどの巨匠になれば、映画づくりでは何をやってもOK！ある意味ではそんな開き直りとも、ある意味ではユーモア満載の「お遊び」ともとれる「あるもの」の出現と、その再度の登場による結末のつけ方を、あなたはどう評価？

2012（平成24）年3月19日記